

「四国辺地」をめぐる覚書

和語「へち」について

西 耕生

一 新勅撰集に収める空海の和歌

土左国室戸といふところに

弘法大師

法性のむろとといへどわがすめばうるの浪風よせぬ日ぞなき

〔新勅撰和歌集・巻十・釈教・五七四〕

「土左国室戸」で詠んだというこの空海の和歌はその内容から、真偽のほどは措いて、つぎに掲げる『三教指帰』序の記事を顧みて、若年の彼が

「土州室戸崎」で修行した折に関わる作と理解されている。

二九遊「聽槐市」。

二九にして槐市に遊聴す。

……爰有「沙門」。

……爰に一の沙門有り。

呈余虚空藏聞持法。

余に虚空藏聞持の法を呈す。

其經説。若人依法。

其の經に説かく、「若し人、法に依つて

誦此眞言一百萬遍」。

此の眞言一百万遍を誦すれば、

即得一切教法文義諸記」。

即ち一切の教法の文義、暗記することを得」と。

於焉。信「大聖之誠言」。

焉に、大聖の誠言を信じて、

望「飛鐵鑽燧」。

飛鐵を鑽燧に望む。

躋攀阿國大瀧嶽」。

阿國大瀧嶽に躋り攀ぢ、

勤「念土州室戸崎」。

土州室戸崎に勤念す。

谷不「惜響」。明星來影。

谷響を惜しまず、明星來影す。

〔三教指帰・序（筑摩書房版『弘法大師空海全集』第六巻）
藤原公任撰の三十六歌仙に擬して、観修寺の栄海が貞和三年（一三三七）
に仏家のみで選び出した『釈教三十六歌仙絵』の断簡の一つに弘法大師を
描いた一幅の墨画が、奈良の大和文華館に所蔵せられている（特別展解説
付き目録『聖と隠者 山水に心を澄ます人々』奈良国立博物館、平成十一年
四月、参照）。その墨画には、さきの『新勅撰和歌集』釈教部に収められ
た和歌と、『三教指帰』序に傍線を施した箇所とが、合わせて書き込まれ
ている。南北朝時代には、この和歌が、阿波大瀧寺・土佐室戸岬など四国
の難所における修行を通して出家を志すに至る若き日の空海の作として理
解されていたことが察せられるであろう。

二 「四国辺地」と和語「へち」

空海が四国において修行した場がいわゆる四国遍路の成立する契機とし
て大きな位置を占めるであろうことは、容易に推察される。しかしながら、
平安時代初期におけるその実態は、不明とするよりほかないのが現状であ
ろう。ようやく平安時代も後期になって『今昔物語集』や『梁塵秘抄』に
見える例などが、四国における聖の修行場のあり方を推察させるものとし
て周知されるに留まるのであろう。

通四国¹辺地²僧、行不知所被打成馬語第十四

今昔、仏ノ道ヲ行ケル僧、三人伴ナヒテ、四国ノ辺地ト云ハ伊予・讃岐・阿波・土佐ノ海辺ノ廻也、其ノ僧共、其ヲ廻ケルニ、思ヒ不懸ズ山ニ踏入ニケリ。深キ山ニ迷ニケレバ、浜辺ニ出ム事ヲ願ヒケリ。

〔今昔物語集・卷三十一（新日本古典文学大系本、四七〇頁）〕
われらが修行せしやうは、にんにくけさをばかたにかけ、またおひを、ひ、ころもはいつとなくしほたれて、しこくのへちをぞつねにふん

〔梁塵秘抄・卷一・四句神歌・僧歌・三〇一〕

（新日本古典文学大系本、八六頁）

ここにみえる「辺地」および「へち」については、例えば、森正人氏が注するように、

海岸沿いの道。「辺土」と同義の辺境の地の意の「辺地」とは別語で、

「辺路」と表記されるべき語であろう。「辺道 へち」（字類抄）。「踏

辺道」（新猿樂記・次郎条）、「我等が修行せし様は：四国の辺道（へち）をぞ常に踏む」（梁塵秘抄・三〇一）、「西行は四国辺路を巡見せ

し」（金刀比羅本保元物語・下）とある通り、聖の修行の道であった。

〔今昔物語集 五〕（新日本古典文学大系37）四七〇頁・脚注五（岩

波書店、一九九六年一月）

と理解されるべき語であろう。因みに、おなじ『今昔物語集』巻十七に、

今昔、伊豆ノ国、大島ノ郡ニ、海ノ岸遥ニ絶テ、鳥獸モ難通キ島有リ。

極テ悪キ辺地也。其ノ島ノ西南ノ方ニ一ノ勝地有リ。昔、江ノ優婆塞

ノ此ノ国ニ被流タリケル時ニ、時々飛ビ来テ勤メ行ヒ給ケル所也。

〔今昔物語集・卷十七・伊豆大島郡建地蔵寺語第十六〕

と見える「辺地」についても、同様に理解しようとする向きがあるけれど

（五来 重『遊行と巡礼』〈角川選書192〉一〇六〜一〇八頁、平成元年十

二月）、破線を施した箇所「海ノ岸遥ニ絶テ、鳥獸モ難通キ島」とする

ところを慮れば、この巻十七第十六語の「辺地」は寧ろ、辺境あるいは辺

土の意と解する方が穏やかであるように思われる。

さて、平安時代末期から鎌倉時代にかけて、「へち」という和語を詠みこんだ歌が少なからず認められる。

〔磯辺桜〕

a ちる花やいそのへちふむやまぶしのこけのころものうはぎなるらん

〔為忠家後度百首・桜・五三・伊豆守為業〕

〔浦路桜〕

b なみかくるへちにちりしく花のうへをこころしてふめはるのやまぶし

〔為忠家後度百首・桜・七六・兵庫頭（源）仲正〕

いそ

伊勢のうみの磯のなかみちいそげどもはやあさしほはみちぞしにける

あさ夕に塩みつ磯の岩ねまつ世にいりこもるほどぞかなしき

c やまぶしのいそのへちふむ真砂地をいかばかりとかあしたゆくくる

しほたればあまにも袖をかしひがたいそ菜つみにとなみをわけつつ

d いまぞわれあらいそ岩のたかなみにへちふみかねて袖ぬらしつる

〔新撰和歌六帖・第三・いそ・一一九一〜一一九五〕

保延元年（一一三五）前後に成立したと考えられる『為忠家後度百首』

や、寛元元年（一二四三）十一月下旬から同二年（一二四四）六月までに

成立したと考えられる『新撰和歌六帖』など、十二世紀から十三世紀にか

けて見える和歌の例を考え合せれば、「山臥」が磯伝いに「波かくるへち」

を或いは「踏みかねて」修行しているありさまが思い浮かべられるであろ

う。実際、「いそのへちのかたに修行し」（新古今和歌集・九一七詞書）て

いると明示する例も見出だせる。ここに、「四国ノ辺地ト云ハ伊予・讃岐・

阿波・土佐ノ海辺ノ廻也」（今昔物語集・卷三十一第十四語）、「ころもは

いつとなくしほたれて、しこくのへちをぞつねにふん」（梁塵秘抄・卷二・

三〇一）とあったところが思い合わせられるのである。

かくして、『今昔物語集』巻三十一第十四語にみえる「四国ノ辺地」が

四国の「へち」という和語を表記したものであったことは、つぎに掲げる『新猿楽記』の本文異同からも付度されるのである。

次郎 真言師

次郎者、一生不犯之大験者、三業相應之眞言師也。久修練行年深、持戒精進日積。……通大峯葛木、踏邊地、年々。……

〔校異〕▽邊地―弘安本「礮邊路」。古抄本・陽明本「邊道」。

〔新猿楽記康永本・次郎条（東洋文庫本、二二六頁）

とりわけ、弘安本に「礮邊路」と「礮」字が附け加わって作られていることは、「へち」が「海辺難路」を意味する和語であったことを如実に物語っている。また、和語「へち」の「チ」が「道」を意味することは、「岐邊道」（黒川本色葉字類抄・上・三九ウ⑥）が端的に示しているとともに、「みち」を意味する「チ」が「道」のみならず「地」と表記されることもあったことは、先に掲げたcの歌に「礮のへち踏む真砂地」とあったのをはじめ、以下に掲げる和歌の例からも、容易に認められる。

▼〔恋路―こひ地―こひ道〕

おとこのはじめて女のもとにまかりて、あしたに雨のふるに、
かへりて、つかはしける （よみ人も）

今ぞしるあかぬ別の暁は君をこひちにぬるゝ物とは

返し

①よそにふる雨とこそきけおぼつかかな何をか人のこひ地といふらん

〔後撰和歌集高松宮臣蔵本・巻九・恋一・五六七（五六八）

②またもなくたゞひとすぢに君を思ふこひ道にまどふ我やなになる

〔千載和歌集龍門文庫本・巻十一・恋一・六七四（大宮前太政大臣）

▼〔舟路―ふな地〕

③ふな地には草の枕もむすばねばおきながらこそ夢も見えけれ

〔拾遺和歌集京都大学附屬図書館蔵中院通茂筆本・巻二六・別・三四九（重之）

▼〔山路―山地〕

大輔がざうしに、あつたゞの朝臣の物へつかはしけるふみを
もてたがへたりければ、つかはしける 大輔
道しらぬ物ならなくにあしひきの山ふみ迷人もありけり

返し

敦忠朝臣

④しらがしの雪もきえにし葦引の山地を誰かふみ迷べき

〔後撰和歌集高松宮臣蔵本・巻十七・雜三・二〇五（二〇六）

⑤きゝすてゝきみがきにけんほとゝぎすたづねにわれは山地こえみん

〔後拾遺和歌抄室戸内書院部蔵本・巻三・夏・一八五（大中臣能宣朝臣）

▼〔別れ路―わかれ地〕

⑥わかれ地をへだつる雲のためにこそ扇の風をやらまほしけれ

〔拾遺和歌集京都大学附屬図書館蔵中院通茂筆本・巻六・別・三一一（よしのぶ）

⑦別地はわたせるはしもなき物をいかでかつねにこひ渡べき

〔拾遺和歌集京都大学附屬図書館蔵中院通茂筆本・巻六・別・三二八（源したがつ）

▼〔野路―の地〕

⑧あづまぢのゝ地の雪まをわけてきてあはれ宮この花を見る哉

〔拾遺和歌集京都大学附屬図書館蔵中院通茂筆本・巻十六・雜春・一〇四九（藤原長能）

▼〔通ひ路―かよひ道〕

⑨世をいとふはしとおもひしかよひ道にあやなく人をこひわたるかな

〔千載和歌集龍門文庫本・巻十一・恋一・六七二（仁昭法師）

⑩はかなしやまくらさだめぬうたゝねにほのかにまよふゆめのかよひ道

〔千載和歌集龍門文庫本・巻十一・恋一・六七七（式子内親王）

三 「ヘンチ」から「ヘンロ」へ

そうして、中世のいずれの時に、この「へち」という和語が「辺地」或いは「辺路」という真名表記に牽かれて「ヘンチ」或いは「ヘンロ」などと訓ぜられるに至る変遷の一斑を次の例によって確認できるのである。

仁安三年の秋のころ、西行法師諸国修行しけるが、しこくのへんぢを巡見のとき、讃岐國にわたり、……さてもかの蓮譽は八重の塩路をかきわけて、宸襟を存生の日に訪たてまつり、この西行はしこくへんろを巡見せし、靈魂を崩御ののちに尋たてまつる。このきみ御在位のみだ、恩によくし徳をかうむるたぐいこそばくぞや。されどもいままはなげの情をかけたてまつるものは、たれか一人もありし。たゞこの蓮譽・西行のみまいるべしとは、昔つゆもいかでおぼしめしよるべき。

〔保元物語(金刀比羅宮所蔵本)・下(新院御経沈めの事(けたり崩御の事))〕

ここに引いた金刀比羅宮本は、通説によれば、最も古態を伝えている本文を持つとされる半井本系に較べて、詞章の最も成熟した本文を持つとされる。西行の崇徳院白峯御陵への参拝説話は、原拠である『山家集』において四国の「へんぢ」或いは「しこくへんろを巡見せし」時だとは一言もふれられていない。つまり、金刀比羅宮本『保元物語』のごとき本文が増補された中世のいづれの時にか、四国の「へんぢ」と「へんろ」とを同語として理解していたことが、明らかに看取れるのである。そして、弘法大師の行跡を慕って西行が四国を「巡見」したように人々が四国の「へち」を「巡見」した、そのような行動のあり方を明示する「遍路」という表記が現れることもまた、想像するに難くないにちがいない。

【参考文献】

(a) 塚田晃信「弘法大師和歌考」『東洋学研究』第七号、昭和四十八年三月。

(b) 五来重『遊行と巡礼』(角川選書192)角川書店、平成元年十二月。

(c) 『国文学 解釈と鑑賞』第六十六卷五号(特集 弘法大師空海)——
今も生き続ける密教不滅の灯)至文堂、平成十三年五月。